OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本研究の将来を考える ： 国際ワークショップ趣旨説明にかえて
Author(s)	安井, 眞奈美
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2019, 2, p. 7-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本研究の将来を考える

―国際ワークショップ趣旨説明にかえて―

安井　眞奈美

１．開催にあたって

2018 年 8 月 3 日，大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室にて，国際ワークショップ「海外における日本研究の動向と展望」を，大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスターと「国際日本研究」コンソーシアムの協力を得て開催することができた。経済的な支援をいただいたことに，まずは御礼申し上げる。

本ワークショップは，これからの日本研究の可能性を，研究者だけではなく大阪大学文学部および大学院文学研究科の学生・院生の皆さんとともに探っていきたいと，宇野田尚哉氏と安井眞奈美が企画したものである。日本研究の成果を誰に対して発信し対話していくのか，その手がかりを得るために，海外の研究者を招き，発表に基づいたディスカッションを行うことにした。日本をフィールドにした地域研究という分野に閉じてしまうのではなく，「日本」という場をさまざまな問題を考えるフィールドとして捉え，国内外の研究者がともに対話を進めていくことを，このワークショップの目的に据えた。

発表者は，いずれも国際日本文化研究センターに滞在中の海外からの研究者の方々である。国際日本文化研究センター（通称，日文研）は 2017 年に 30 周年を迎えた。大阪大学文学部日本学科とほぼ同じ時期に創設された研究機関である。日文研では，日本の文化や歴史を研究する国際的な連携を創り上げるとともに，世界の日本研究者を数多く受け入れて支援してきた。発表者の皆さんには，ご自身の研究を中心に海外での日本研究の最新情報についてもご発表いただいた。

２．日本研究の最前線――発表内容の紹介

「第 1 部　日本研究の新展開」では，韓国の研究者お二人にご発表をお願いした。基調講演者の金容儀さんは，全南大学校日本文化研究センター長を勤められた経験も踏まえて，韓国の日本研究の最新情報と，ご自身のこれまでの研究を振り返って発表された。金さんは柳田国男の『遠野物語』を初めて韓国語に翻訳するなど（2009 年に全南大学校出版部より刊行），翻訳の実績も積んでおられる。1990 年代に大阪大学大学院文学研究科の日本学

研究室で民俗学を学び，当時より日本各地のフィールドワークを精力的に続けている。発表では，韓国の 13 カ所の大学に日本研究所があるが，韓国においても日本の「国際日本研究」コンソーシアムのような，日本研究を行っている大学間のネットワークを創り上げていくこと，さらにそれを海外に広げていくことが重要である，と指摘された。今回の国際ワークショップが，日本研究を軸にした日韓の大学間ネットワークのさらなる構築に貢献できることを願う。

続いての発表は韓国の金日林さんである。マンガやアニメを研究する中で日本に興味を持ち，日本研究を始めるようになったという。あえて「マンガ・アニメ共栄圏」という挑発的な用語を用いることによって,「オタク文化的公共性」について再検討するという発表である。戦中，国民の戦意高揚のために負の感情を抑圧し，笑いに変えてコントロールしようとする“ニコニコ運動”が分析された。

第 1 部の発表に対して，北村毅さんがコメントを行った。

「第 2 部　日本研究の最前線」では，独自の視点から日本の伝統芸能および民間習俗を分析する，お二人の研究者に発表をお願いした。ペトコヴァ・ガリアさんは，世界各地のパフォーミング・アーツをフィールドワークを行いながら研究し，日本の伝統芸能にも造詣が深い。日本の祭礼・儀礼のデータベースを作成するという将来の計画も持つ。「日本の伝統芸能におけるジェンダー」と題した発表では，日本の女性芸能者の特徴を中世末期にさかのぼって概観した上で, 1746 年に初めて演じられた歌舞伎の「女暫（おんなしばらく）」を素材に，日本文化における女性の身体性や女性らしさが，舞台上で男性の身体によって演じられてきた点を解明した。

また美術史が専門のセシル・ラリさんは，18 世紀終わりから 20 世紀半ばにかけて流行した和凧を研究対象とし，その成果の一部を「From Amusement to Fire Prevention: The Kite Market of Ōji Inari Shrine」と題して英語でご発表された。毎年 2 月の初午に，王子稲荷神社と装束稲荷神社で行われる凧市に出される火除け凧が，いかにして誕生し,「伝統」として根付くようになったのか，制作者への聞き取りも含めて,「伝統の創造」のプロセスを鮮やかに解明した発表であった。ラリさんは 2018 年 12 月に，パリで凧の国際シンポジウムを開催するなど，和凧に限らず，凧の文化を有する世界各地の研究者との交流を進めている。

第 2 部の発表に対するコメントは，丸山泰明さんが行った。

その後，発表者，コメンテーターに加え，宇野田氏，安井も加わり，参加者も含めて総合討論を行った。個別の発表に対しての質疑応答ののち，日本研究のこれからの可能性を視野に入れた活発な議論を行うことができた。また 4 人の発表者は，学生や院生の皆さんからの質問やコメントによって，自分の研究対象をあらためて見なおす機会になったと話された。

３．ワークショップ参加者の感想，コメント

本ワークショップは，安井が非常勤講師として担当した集中講義の一環でもある。集中講義においては，安井が 1986 年に大阪大学文学部に日本学科が創設された際の 1 期生として入学した当時の日本研究の状況と，30 年を経て国際日本研究が提唱されるようになった現代までの流れを概観した。その際に参照した宇野田尚哉さんの「「日本学」の 30 年――1980 年代と 2010 年代のあいだ」（『なぜ国際日本研究なのか』）は 30 年の流れを的確に捉えた論考であり，現状の理解の助けとなった。これをもとに筆者は，集中講義において，既存のディシプリンを踏まえた上での日本研究――たとえば民俗学や文化人類学に基づいた日本研究――から，方法論を鍛える場としての国際日本研究への転換に向けて，自らの研究テーマをいかにして練り上げていくかが課題であることを伝えた。本ワークショップは，その実践編として位置づけられる。

受講生には，ワークシップに参加した感想やコメントを書いて提出してもらった。以下そのいくつかを紹介し，当日のワークショップの様子を参加者の視点からお伝えしたい。

- 一言「日本」と言ったときに出てくる対象が，本当に多岐にわたっているのだと感じられる時間であった。
- 発表はすべて，初めて聞くような対象では無かったにもかかわらず，内容自体は新たな発見ばかりで非常に刺激的であった。
- 日本研究の機関同士をつなぐネットワークの大切さがよくわかった。この時代，技術はいくらでもあると思うので，それを柔軟に取り入れていくための制度作りを急がねばならないと思った。
- いずれの発表も，現代の日本を批判的に考察する上で，非常に重要な発表だったと思う。ジェンダーに関する議論も展開され，満足できた。
- 日本と韓国だけではなく，中国，台湾など東アジアという広い視野で考えていくと，韓国のこともさらに理解できるのではないかと感じた。

以下，個別の発表に対するコメントである。

- マンガやアニメの様式や感受性，態度など，大東亜共栄圏のような感情の共同体を創ろうというような意志はあるのか，疑問に思った。韓国での日本のアニメ・マンガの受容のされ方と，日本での K-POP の受容のされ方は同じなのか気になった。
- 凧について知っていても，凧市の伝統などについてはほとんど知らず，伝統が創られていく過程が分析されていて，興味深かった。
- 英語で発表を聞くことができて刺激的であった。

- 男性中心であった日本の伝統芸能に対するジェンダーというテーマ自体が，意外に盲点であったので，とても興味深く聞くことができた。
- 日本の伝統芸能におけるジェンダーは，いままで考えたことがなかったので，はっとさせられた。

上記は，多くのコメントの一部にすぎないが，参加者の満足の度合いを知ることができた。

本特集により，日本研究のこれからについて考える手がかりをつかんでいただければ幸いである。

引用文献

宇野田尚哉 2018「「日本学」の 30 年――1980 年代と 2010 年代のあいだ」松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和編『なぜ国際日本研究なのか――「国際日本研究」コンソーシアムシンポジウム記録集』晃陽書房